

ウクライナの詩人オスタップ・スリヴィンスキー著、日本文学研究者ロバート・キャンベル氏訳の『戦争語彙集』からの言葉を、今少し、紹介したい。

「**〈食べもの〉** 東部地域からやってきた家族を一晩お世話することになりました。台所に案内して言いました。『ここがキッチン。食卓にある食べものを召し上がってくださいね』。その瞬間、彼らは泣き始めたのです。『キッチンにある食べものを、召し上がってくださいね』という一言で。」人間にとって飢えほど辛いことはない。食べていいと言われ、泣き出す人の思いが伝わる。「**〈カナリア〉** 通りかかった瞬間、窓の中からカナリアの鳴き声が聞こえてきます。子どもの頃カナリアを飼っていたから、音色をよく知っています。きっと家の人たちが防空壕に潜ったきり、上がってこられなかったんでしょうね。それまでもそれからもいろいろなことがあったけれど、あの一羽のカナリアのことは忘れられません。」置いていかれたカナリアが鳴いている。爆音を聞き続けた中で、カナリアの声が忘れられない。「**〈部屋〉** 言葉って賢いですよね。そう、言語。良い例がポーランド語のポークイ。『平和』も『部屋』も意味します。素敵な言葉じゃありませんか。寝る前に思い浮かべます。窓を開けると、雨がザーと降り注ぎ、車がアスファルト上をサーと走り抜けていく… 故郷を思い出します。そこにはもう、平和も部屋もないけれど。」故郷を追われ、住むべき部屋も、そして、平和もない悲しみ。「**〈色彩〉** 今やマリウポリ市はまるで等高線地図みたいになっている、と、どこかで読みました。ウクライナ全土が今そんな感じに思えます。無色で、あるのは国境だけ。離れてよ、触らないで。色彩はいつか戻ってきます。わたし、思い浮かべたんです。宮崎監督のアニメに出て来るような、今は目に見えない花々がいっせいに咲き乱れるような感じだろうな、って。」色の無い世界から、アニメに描かれたような花が咲き誇る色彩のある世界を望む。「**〈恋愛〉** 彼がわたしの手を取ったり、髪の毛をそっと指で触れたり、すべてわたしが夢見ているとおりの時間でした。… ミサイル部隊に入っているから、きっと今度は前線に配属されるだろう、と話してくれました。わたしたちはさよならを言わなければなりませんでした。」戦争が終わって、二人が結ばれることを祈る。「**〈きれいなもの〉** 戦争では、きれいなものが危険になります。きれいなもの、人、関係は、今や、心を動かすためでなく、根こそぎ潰されるためにあります。憧れと愛撫のためでなく、苦しみのためにあるのです。」醜い心が戦争を生み出し、きれいなものを奪い去る。悲劇は美を見つけ出すことができないようにする。「**〈血〉** 最近血を見ることが多い。怖いというのではなく、ただ目に入るのです。以前からこんなにまわりに血があったのかな、と思います。占領された地域の地図を見るにつけてもそうで、バラのような赤い色に塗られているんですよ。まるで地図の縁から血が滲み出ているように見えて。」国境線の戦闘で、血は流されている。地図にも血が滲んでいる。「**〈銃弾〉** 魂に罪を背負うことになったのかどうかは分からない。ただ狙いを定め、撃つだけだ。ただし撃つ時、目をつぶる。オレの銃弾（タマ）が誰かを殺めたかどうかは、想像にまかせるわ。」銃弾が敵兵に当たり死んだ時、自分は罪を負うのかと問っている。「**〈喜び〉** わたしたちが見てきた一切は夢ではないからです。もう『我が家』は存在しないのです。そこで心に決めました。勝利に向けてベストは尽くすけど、大切な日々を引き渡すことはしません。地面に横たわって苦しむことも、一日たりともしません。彼らへの怒りをわたしの喜びに変えてみせます。そう。怒りから生まれた喜びなのです。」怒りを喜びに変えるとは、何と悲しいことか。戦争とは、そのように残酷なものなのである。